

八幡館跡

一市道菖蒲沢後原線道路改良工事に伴う発掘調査報告書一

八
幡
館
跡

平成22年3月

宮城県栗原市教育委員会
宮城県栗原市建設部

平成22年3月

宮城県栗原市教育委員会

宮城県栗原市建設部

八幡館跡

—市道菖蒲沢後原線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

平成22年3月

宮城県栗原市教育委員会

宮城県栗原市建設部

序 文

栗原市は宮城県の北西部に位置し、県の総面積の約11%を占め、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残っております。貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きる私たちの責務であります。

平成20年6月14日、岩手・宮城内陸地震が発生し、栗原市内で震度6強を観測しました。栗駒・花山地区などの山間部で大規模な山崩れなどが発生し、多数の犠牲者をだしました。また、市内の多数の文化財も甚大な被害を受けました。この地震被害により、文化財という歴史的財産を後世まで残していくことの難しさを痛感し、また、その重要性を改めて感じました。そして、「がんばろう 栗原」を合い言葉に、市全体で震災からの復興に取り組み、被害を受けた文化財も所有者等の協力を得ながら修復活動を行ってまいりました。

本書は、平成20年に実施した栗原市栗駒地区に位置する八幡館跡の発掘調査報告書です。この発掘調査中に岩手・宮城内陸地震が発生し、調査は一時中断を余儀なくされました。多くの方のご協力により発掘調査を終えることができました。この調査では縄文時代の狩猟用の落しぬけが発見され、この場所が当時、狩猟の場であったことがわかりました。

最後に、調査を進めるにあたり、ご指導、ご協力いただきました宮城県教育庁文化財保護課、作業中に地響きや余震を何度も体験しながらも作業を手伝っていただいた作業員の皆様に感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成22年3月

栗原市教育委員会教育長 亀井芳光

目 次

序 文

目 次

例 言

I.	遺跡の位置と地理的、歴史的環境	1
II.	調査にいたる経緯と調査方法	3
III.	基本層序	5
IV.	検出された遺構と遺物	9
V.	考 察	13
VI.	まとめ	14
	参考引用文献	14

写真図版

報告書抄録

図 目 次

第1図	栗原市の位置	第8図	SK 1 土坑
第2図	八幡館跡と周辺の遺跡	第9図	SK 5 土坑
第3図	八幡館跡と調査区の位置	第10図	SK 6 土坑
第4図	八幡館跡縄張図	第11図	SK 2 土坑
第5図	基本層②(北調査区斜面)	第12図	SK 3 土坑
第6図	調査区の位置	第13図	SK 4 土坑
第7図	調査区平面図		

表 目 次

第1表 検出された土坑一覧

写真図版目次

写真図版1	南調査区全景、北調査区南部全景
写真図版2	北調査区中央部全景、北調査区北部全景
写真図版3	北調査区基本層、南調査区基本層とSK 4 土坑断面、SK 2 土坑完掘状況 SK 2 土坑断面、SK 3 土坑完掘状況、SK 5 土坑完掘状況、SK 3 土坑断面、 SK 5 土坑断面
写真図版4	SK 6 土坑完掘状況、SK 6 土坑断面、SK 1 土坑完掘状況、SK 1 土坑断面 SK 4 土坑完掘状況、SK 2 土坑出土石器、SK 1 土坑出土土器

例　　言

1. 本書は市道菖蒲沢後原線道路改良工事に伴う八幡館跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる一連の作業は、調査原因となった事業主である栗原市建設部建設課の依頼を受けて栗原市教育委員会が行ったものである。
3. 調査は次の要項で実施した。

遺跡名：八幡館跡（やわたたてあと）（遺跡登録番号43032）

所在地：栗原市栗駒八幡菖蒲沢地内

調査面積：967m²（対象面積1980m²）

調査期間：平成20年5月28日～8月8日

調査主体：栗原市教育委員会教育長 佐藤光平（～平成21年5月）

〃 亀井芳光（平成21年5月～）

調査担当：栗原市教育委員会文化財保護課 三浦 実 安達訓仁

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：栗原市建設部建設課、㈱宮城建設

発掘調査参加者：石川 卓 小野寺憲治 小岩 猛 庄司玉夫 庄司佳朗

千葉一男 白鳥 力 白鳥綾子 曾根 黙 白幡宗夫

整理作業参加者：芳賀雅子

4. 遺構番号は通し番号を各遺構に付した。
5. 土層や土器の色調表現は『新版標準土色帖』（小山・竹原編1997、㈱日本色研事業）に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。
6. 図中にある方位は真北を表している。
7. 調査区全体図は1/300、遺構平面図及び断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また、遺物は1/3に統一した。
8. 遺物写真的縮尺は2/3である。
9. 第2図は国土地理院作成の数値地図「岩ヶ崎」と「金成」を用いて作成した。また、第3図の八幡館跡縄張図は室野秀文氏より提供いただいた。
10. 発掘調査及び報告書作成に際し、次の方々よりご指導、御助言をいただきました。記して感謝申し上げます。
山田晃弘、須田良平、三好秀樹（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤信行（日本考古学協会員）
11. 調査によって得られた資料は、全て栗原市教育委員会（栗原市築館出土文化財管理センター）で保管している。
12. 本書の執筆、編集は調査員の協議を経てI、IIを安達、III～VIを三浦が行い、編集は三浦が行った。

I. 遺跡の位置と地理的、歴史的環境

宮城県北西部に位置する栗原市は岩手、秋田両県と接している（第1図）。栗駒地区はの中でも北西隅に所在し、宮城県北部を南北に貫く奥羽山脈と岩手県から宮城県北東部にかけて伸びる北上山地に挟まれた北上川沿岸低地（仙北平野低地）のうち、北上川流域右岸の一画に位置している。



第1図 栗原市の位置

ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら緩やかな起伏をもつて南東方向に連なる派生丘陵の中ほどにあたり、標高約40～100mのなだらかな丘陵地帯や河岸段丘を形成している。奥羽山脈に源を発する一迫川、二迫川、三迫川などにより複雑に開析されて樹枝状となった幅の広い谷底平野やその麓には低地（後背湿地や自然堤防）が広がる（宮城県企画部土地対策課 1986）。

八幡館跡は、この丘陵地帯のうち東に伸びる丘陵上、標高約50～100mに立地している。北側には段丘と三迫川が東流し、南側には段丘と熊川、二迫川が東流する。本遺跡は現在、学校用地、団地、宅地、田地、畠地、山林、神社境内として利用されている。

本遺跡の周辺には縄文時代から中・近世にいたるまでの遺跡が多数分布する（第2図）。これらの多くは河川流域の丘陵や段丘上に認められる。ここではこれまでの調査・研究の成果から、縄文時代から中世の歴史的環境を記述する。

縄文時代の遺跡には落とし穴が多数確認された長者原遺跡（栗駒町教委1995）、水吸遺跡（栗原市教委2007）、獸骨と晩期の土器が出土した有賀沢遺跡、中期の土器や土偶が出土した陣場遺跡（金成町史編纂委員会2004）などがある。弥生時代の遺跡には大泉式が出土した清水田遺跡がある。古墳時代の遺跡には竪穴住居跡が確認された長者原遺跡（栗駒町教委1995）がある。住居跡からは南小泉式が出土しているとともに、住居跡の周辺からは石製模造品がまとまって出土している。古代になると遺跡の数は増加する。築館城生野地区には『続日本紀』にみえる神護景雲元年（767）に律令政府により造営された城柵官衙である国史跡伊治城跡（多賀城研1978～1980、築館町教委1990～2005、栗原市教委2006～2008）が所在する。集落遺跡には伊治城跡が存続した時期の竪穴住居が確認された長者原遺跡（栗駒町教委1995）、建物跡が確認された泉沢A遺跡（栗原市教委2006）、竪穴住居跡や建物跡、焼成遺構が確認された水吸遺跡（栗原市教委2007）、礎石建物や池が確認されている栗原寺跡（栗原寺調査団1963、宮城県教育委員会1996）、墳墓には銅帶金具が確認された鳥矢ヶ崎古墳（栗駒町教委1972）がある。古代末から中世初期の遺跡には伊治城跡（築館町教委1993、栗原市教委2008）、長者原遺跡（栗駒町教委1995）などがある。中世の遺跡としては城館跡などが確認されている。二迫川沿岸や三迫川沿岸の丘陵上や段丘上に大原木館跡（鎌棟城跡）、黒岩館跡、鶴丸館跡（栗駒町教委1978）、三玉城跡（栗原市教委2008）、猿飛来館跡、長網沢館跡、森館跡、桜田館跡、下館跡、長者原館跡、



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	八幡館跡	城館・散布地	縄文、古代、中世	14	島矢ヶ崎古墳群	古墳	古墳、古代	27	長岡沢館跡	城館	中世
2	臥牛部跡	城館	中世	15	猪俣東館跡	城館	中世	28	木坂道跡	集落	縄文、古代
3	八幡道跡	散布地	縄文	16	長原寺跡	寺院	古代？	29	泉沢B道跡	散布地・街道？	縄文、古代
4	森館跡	城館・散布地	縄文、中世	17	尾松道跡	散布地	古代	30	泉沢A道跡	集落	古代
5	中の森道跡	防火台？		18	栗原寺跡	寺院	古代・中世	31	守島道跡	散布地	古代
6	要害内館跡	城館・散布地	古代、中世	19	栗原船跡	縄文・中世	散布地・城館	32	長者原道跡	集落	古墳中、古代、中世
7	清水田道跡	散布地	弥生・中	20	下船跡	城館	中世	33	長者原船跡	城館	中世
8	玉の井館跡	城館	中世	21	二三城跡	城館・散布地	縄文、古代、中世	34	豊後船跡	中世	城館
9	玉の井沢館跡	城館	中世	22	有賀沢道跡	散布地	縄文晚	35	志望ヶ森道跡	散布地	縄文
10	黒岩船跡	城館	中世	23	板田船跡	城館	中世	36	平野船跡	城館	近世
11	岩ヶ崎船跡	城館	中世、近世	24	有賀ヶ崎跡	古墳	古墳	37	大原木船跡	散布地・中世	縄文中・蛇、中世
12	田中郡跡	城館	中世	25	砂子田古墳群	古墳	古墳	38	諏訪道跡	散布地	縄文中、古代
13	里谷森船跡	城館	中世	26	山高野船跡	城館	中世	39	鶴山空港跡	散布地・城館	

第2図 八幡館跡と周辺の遺跡

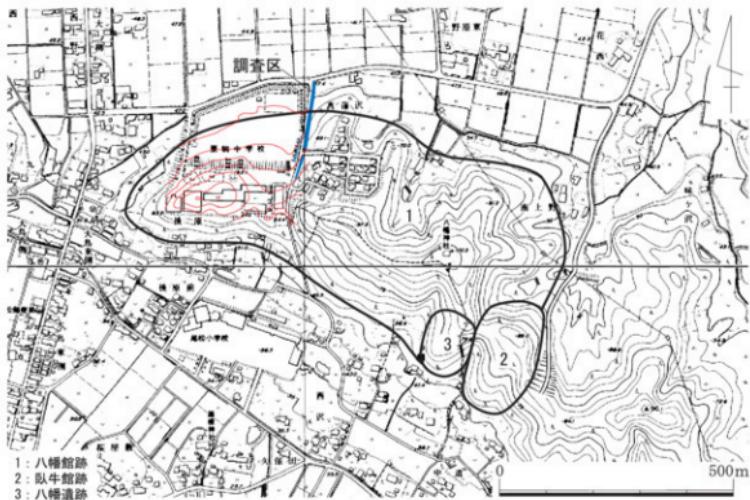
要害内館跡など多数の城館跡がある（宮城県教育委員会1998）。数多くの館跡が確認できる要因として交通上要衝の地であったことや、戦国時代には大崎氏と葛西氏による領地の境界付近であったため、騒乱の場となったことをあげることができる。また、長者原遺跡（藤沼・神宮寺1992）（栗駒地区）では昭和41年（1966）の開田作業中に多量の古銭（56銭種、4,325枚、最新銭種「至大通宝」）が発見されている。

II. 調査にいたる経緯と調査方法

八幡館跡は、栗原市栗駒八幡地内の丘陵上に位置する中世の城館跡である（第3、4図）。八幡館跡は、日本史上に登場する遺跡として重要である。『薩奥話記』にある前九年の役（1061～1070）の際、源軍と清原軍が合流した「菅岡」の推定地であり、また同所には坂上田村麻呂が掘った斬壕が残っていると記されている。興国4年（1331）におきた三迫合戦にも登場することが知られている。また、頂上（主郭）に鎮座する屯ヶ岡八幡神社の西参道付近では、古代の土師器や須恵器が採集されている。

平成18年5月、栗原市建設部建設課より市道菖蒲沢後原線の改良工事計画についての照会があった。計画は西側に傾斜する斜面を切り土し、5m幅の市道を10mにするものであった。計画地は八幡館跡の範囲北側に位置することから、協議書及び埋蔵文化財発掘通知の提出と確認調査が必要であることを説明した。その後、諸般の事情により、協議書の提出が遅れ、平成19年5月18日付で協議書が提出された。しかし、7月下旬には事前連絡なく抜根作業が開始されたので、工事の一時中止と今後のスケジュールについて打ち合わせを行うこととなった。平成19年9月12日付で埋蔵文化財発掘通知が提出された後、宮城県教育庁文化財保護課、栗原市文化財保護課、栗原市建設課で現地において経緯の聞き取りを行った。その後、市建設課と市文化財保護課と協議により、平成19年度は西側の擁壁積工及び側構部分の工事立会を行い、平成20年度春より確認調査を行い遺構が確認された場合には、引き続き事前調査を行うこととした。伐採が終了していることから現地の観察を行ったところ、帶曲輪状の平坦面と切岸状の緩斜面が確認されたので、北側に張り出す丘陵の踏査を行い、4段分の帶曲輪状の平坦面及び切岸状の緩斜面が確認された。工事範囲には3段目と4段目がかわりを持つので、現況記録の作成を行った。一方、この部分が城館期の遺構であるのかを検討するため佐藤信行氏、市文化財保護課職員と踏査を行ったが、城館期の遺構とするには切岸の高さがあまりなく、斜面も緩やかであることから防御機能は少ないのではないかとの意見をいただいた。整地層の有無や緩斜面が切岸であるかどうかは確認調査により検討していくこととした。なお、周辺での発掘調査は市町村合併後に本格化し、平成18年度に菖蒲沢後沢線で下水管設置に伴う工事立会いで土坑とみられる落ち込みが1基確認されている。

擁壁積工部分の工事立会は平成20年1月11、18日に実施した。南側20m分では旧ブロックの設置により破壊されている範囲内であったが、北側20m分では旧表土が北西側に傾斜して残存していたが、遺構や遺物は確認されなかった。その後、2月25日に耕設置部分2ヶ所、側構設置場所について工事立会をおこなった。いずれも掘削底面が地山上面であり、遺構や遺物は確認されなかった。



第3図 八幡館跡と調査区の位置

赤線は昭和46～48年度に実施された
栗駒中学校造成前の等高線を示す。



第4図 八幡館跡縄張図

確認調査は、平成20年5月28、29日に実施した。対象地内に任意に調査区を設け、重機により掘り下げを行った。北調査区の北側で縄文土器を含む土坑1基（SK1）、中央付近で落とし穴の可能性がある溝状の落ち込み1基（SK5）を確認し、遺構の密度は薄いが縄文時代の遺構が確認された。一方、調査以前に城館期にかかわる可能性が考えられた平坦面や緩斜面については、表土（腐葉土）がほとんどなく、整地層も確認されなかった。堆積土の傾斜と地山面の傾斜がほぼ同様の傾斜を持っていた。これらのことから、平坦面と緩斜面は近年に形成された可能性が考えられた。

確認調査の結果、遺構がまばらに分布するので、対象地を平面的にひろげて、事前調査を行うこととした。事前調査は北調査区北端部分から開始した。6月9、10日に遺構の掘り下げと記録の作成を行った。6月10日に南調査区の表土除去を行い、遺構確認作業及び遺構の掘り下げを開始した。しかし、6月14日に岩手・宮城内陸地震が発生し、指定文化財や未指定文化財の被災状況の確認と対応のため調査を中断することとした。作業が再開できたのは7月7日からであった。引き続き、遺構の掘り下げと記録の作成を行った。南調査区では溝跡を2条確認し精査を行った。底面近くからブルタブが出土したことから現代の溝跡と判断した。7月17日に北調査区南側の表土除去を行い、土坑1基（SK5）を確認し、精査を行った。その後、7月31日から8月1日、8日にかけて北調査区区中央から北側にかけての表土除去を行い、遺構確認作業を実施し、土坑1基（SK6）を確認した。各種の記録を作成し、8月9日に器材を搬出し、現地調査を終了した。最終的に確認された遺構は土坑6基である。

平面図記録は株アイシン製の電子平板「遺構くん」を用い、断面図については1/20で作成した。写真記録は一眼レフデジタルカメラ（800万画素）を用いて、調査の進行に合わせ撮影を行った。

整理作業は野外調査終了後、遺構と遺物の基礎整理を実施した。その後、断面図のトレースや遺物の図化、本文執筆などの作業を行はずべての事業を終了した。

III. 基本層序

調査区は、東西にのびる丘陵の北西斜面に位置している（第6図）。標高は45～60mである。基本層は、次のとおりである。

基本層①（北調査区丘陵下平坦面）

I層：にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土。黒褐色（2.5YR3/1）粘土を含む。竹の根が多い。

層厚約15cm。表土。

II層：褐灰色（10YR4/1）粘土。層厚10～15cm。

III層：黒色（10YR2/1）粘土。地山粒を少し含む。層厚10～15cm。

IV層：褐色（10YR4/4）粘土。漸移層。層厚10～15cm。

V層：にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質粘土。地山。

基本層②（北調査区斜面）（第5図）

I層：黒褐色（10YR2/3）シルト。現代のゴミを含む。市道に沿って調査区西側に堆積する。

削平を受けているため大きな段がある。層厚20～70cm。表土。

II層：褐色（10YR4/4）シルト。明褐色土粒を含む。層厚10～60cm。表土。

III層：暗褐色（10YR3/3）シルト。明褐色土粒を含む。層厚10～30cm。

IV層：黒褐色（10YR2/3）粘土質シルト。暗褐色土を含む。層厚10～20cm。

基本層③IV層と対応する。

V層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト。地山粒を多く含む。漸移層。層厚20～30cm。

基本層③V層、基本層④II層と対応する。

VI層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト。直径1cm程の礫を含む。地山。

基本層③（南調査区斜面）（第13図）

I層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト。層厚15～40cm。表土。

II層：灰白色火山灰。ブロック状に堆積する。層厚2～8cm。

III層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト。層厚10～15cm。

IV層：黒褐色（10YR2/3）粘土質シルト。暗褐色土を含む。層厚4～10cm。

基本層②IV層と対応する。

V層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト。地山粒を多く含む。漸移層。層厚10～15cm。

基本層②V層、基本層④II層と対応する。

VI層：明褐色（10YR6/6）粘土。直径2cm程の礫を含む。地山。標高の低い部分で確認。

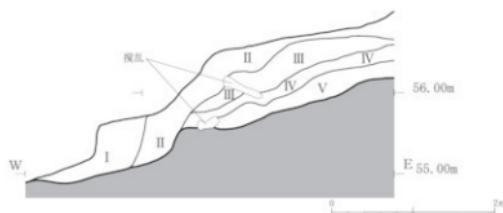
基本層④（南調査区平坦面）

I層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト。層厚15～40cm。表土。

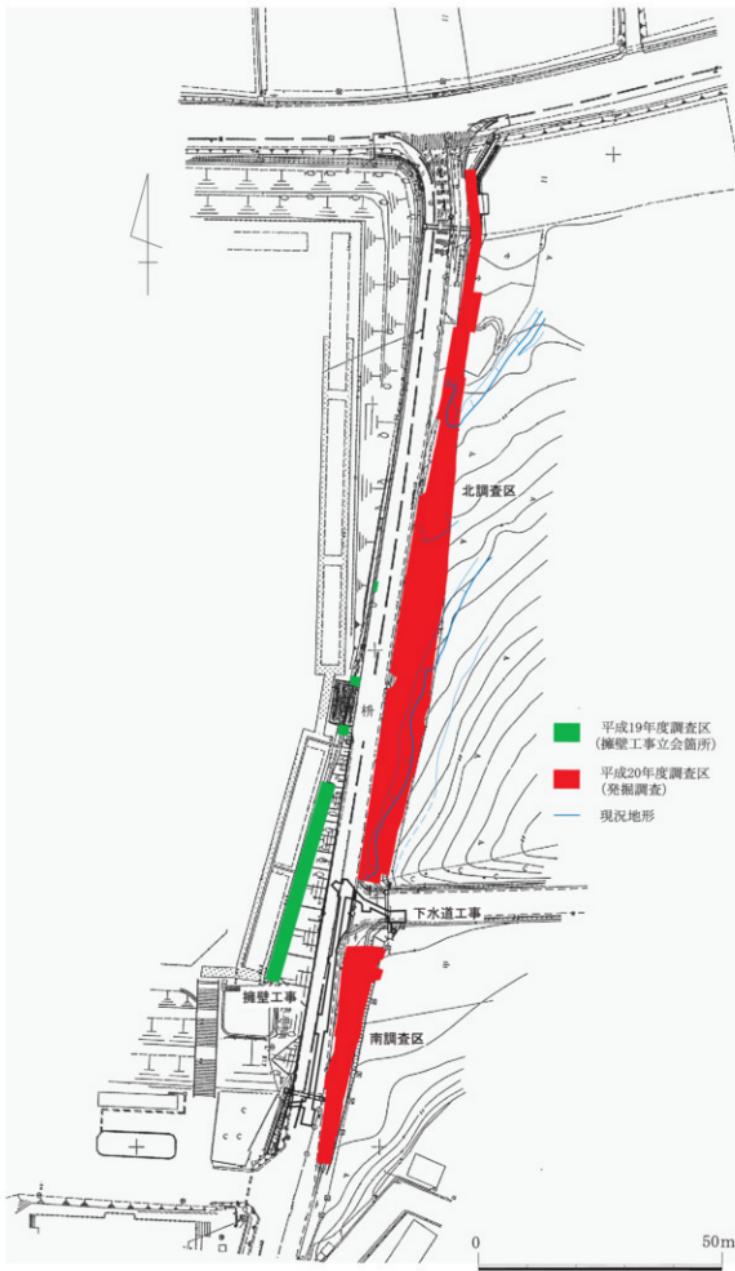
II層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト。地山粒を多く含む。漸移層。層厚10～15cm。

基本層②V層、基本層③V層と対応する。

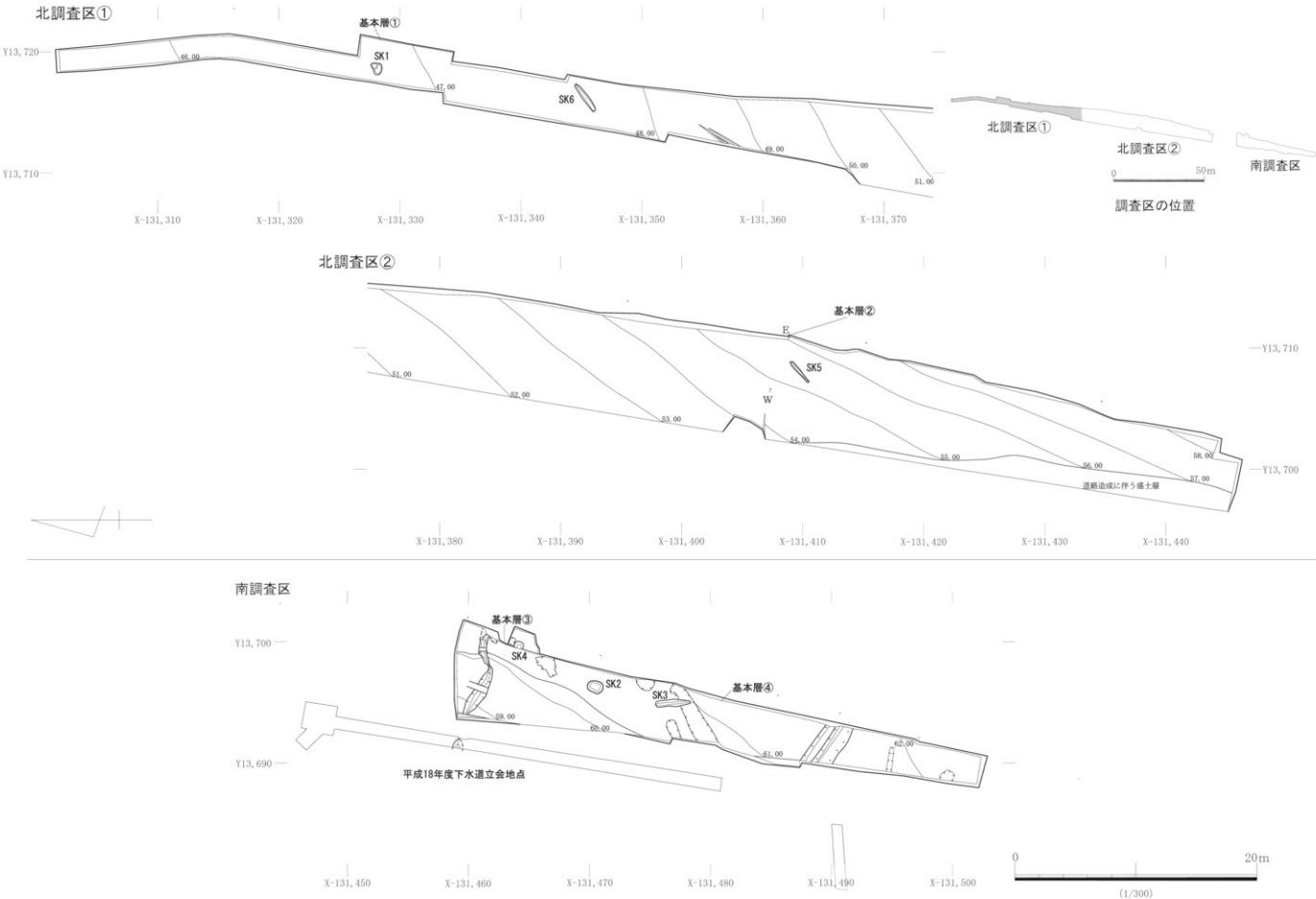
III層：褐色（10YR4/6）粘土質シルト。地山。標高の高い部分で確認。



第5図 基本層②（北調査区斜面）



第6図 調査区の位置



第7図 調査区平面図

IV. 検出された遺構と遺物

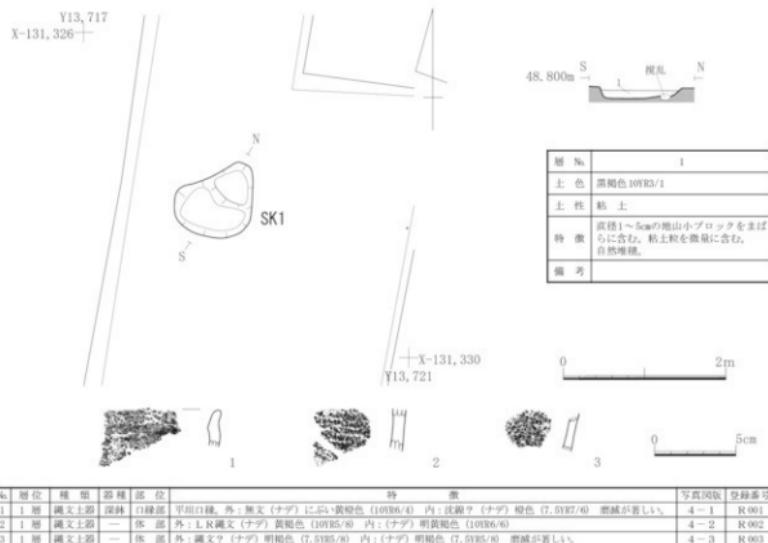
検出された遺構は、北調査区で土坑3基、南調査区で土坑3基である（第7図）。遺物は、土坑から縄文土器、石器が出土し、遺構外では確認されなかった。

北調査区

【SK1 土坑】（第8図）

北調査区斜面裾部で確認された。重複はない。平面形は不整な五角形を呈する。規模は長軸1.04m、短軸0.94m、深さ0.15mである。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がり、断面は皿状を呈する。堆積土は黒褐色粘土の1層で自然堆積である。

堆積土より縄文土器片が3点出土している。



第8図 SK1 土坑

【SK5 土坑】（第9図）

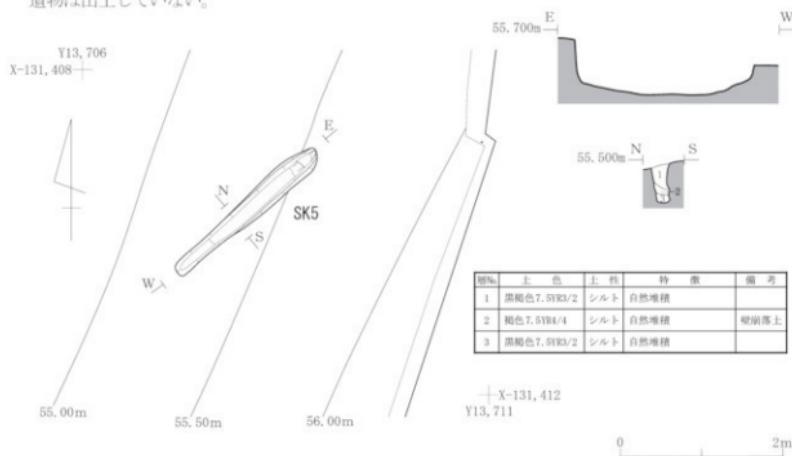
北調査区南側の斜面で確認された。重複はない。平面形は溝状を呈する。規模は長軸2.26m、短軸0.30m、深さ0.48mである。底面はほぼ平坦である。壁は南辺が緩やかに立ち上がり、途中で垂直に立ち上がるが、他はほぼ垂直に立ち上がり、断面は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は3層で、すべて自然堆積である。

遺物は出土していない。

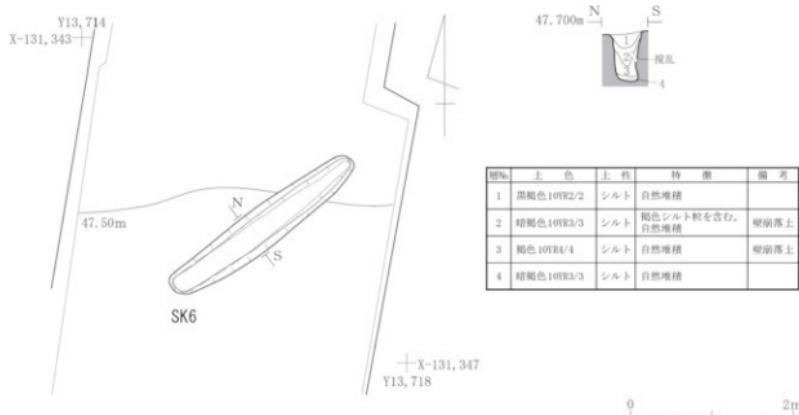
【SK 6 土坑】(第10図)

北調査区北側の丘陵裾部平坦面で確認された。重複はない。平面形は溝状を呈する。規模は長軸2.70m、短軸0.35m、深さ0.60mである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は4層で、すべて自然堆積である。

遺物は出土していない。



第9図 SK 5土坑



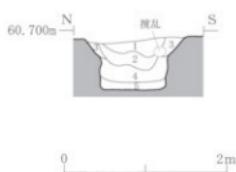
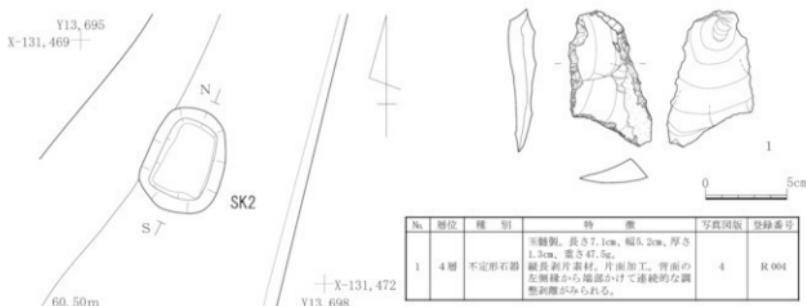
第10図 SK 6土坑

南調査区

【SK 2 土坑】(第11図)

南調査区北側の北西斜面で確認された。重複はない。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.30m、短軸0.95m、深さ0.62mである。底面はほぼ平坦である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、上部は崩落のため開く。堆積土は5層で、すべて自然堆積である。

堆積土から玉髓製の不定形石器が1点出土している。



第11図 SK 2 土坑

【SK 3 土坑】(第12図)

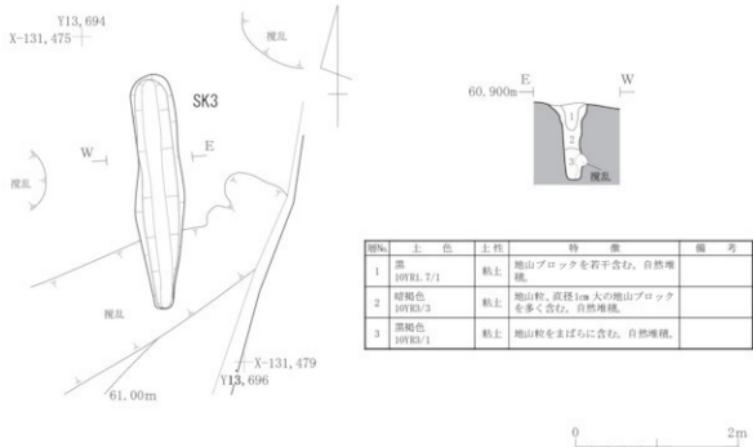
南調査区ほぼ中央の北西斜面で確認された。重複はない。平面形は溝状を呈する。規模は長軸2.90m、短軸0.6m、深さ0.9mである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面は短軸方向でU字形を呈する。堆積土は3層で、すべて自然堆積である。

遺物は出土していない。

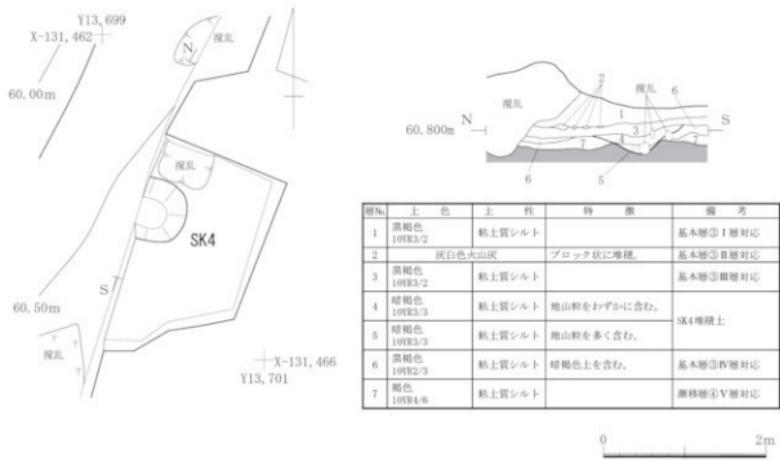
【SK 4 土坑】(第13図)

南調査区北側の東端部の平坦面で確認された。重複はない。遺構は、灰白色火山灰が堆積した層に覆われている。平面形は梢円形を呈すると考えられる。規模は南北0.78m、東西0.60m以上、深さ0.22mである。底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層で、すべて自然堆積である。

遺物は出土していない。



第12図 SK3 土坑



第13図 SK4 土坑

V. 考 察

検出した遺構は、北調査区で土坑3基、南調査区で土坑3基である（第7図）。遺物は、遺構より縄文土器、石器が出土し、遺構外では確認されなかった。ここでは、検出された土坑について若干の考察を行う。

遺構の特徴と時代について

検出された土坑の特徴は、次のとおりである。遺構はすべて地山面で検出しておらず、遺構の掘り込み面は確認することはできなかつたが、遺構堆積土から想定される掘り込み面は、SK1、6は基本層①のIII層、SK2、3、4は基本層③のIV層、SK5は基本層②のIV層と考えられる。

第1表 検出された土坑一覧

遺構No.	立 地	平面形	断面形	堆積状況	遺 物
SK1	丘陵裾平坦面（北調査区）	不整な五角形	皿 状	自然堆積	縄文土器片
SK2	丘陵頂部平坦面（南調査区）	圓丸長方形	U 字 状	自然堆積	不定形石器
SK3	丘陵頂部平坦面（南調査区）	溝 状	U 字 状	自然堆積	—
SK4	丘陵頂部平坦面（南調査区）	円 形	皿 状	自然堆積	—
SK5	丘陵斜面（北調査区）	溝 状	U 字 状	自然堆積	—
SK6	丘陵裾平坦面（北調査区）	溝 状	U 字 状	自然堆積	—

SK2、SK3、SK5、SK6は、その形態的特徴から縄文時代の狩猟用落とし穴（Tピット）と考えられる。底面に杭などの痕跡は確認できなかつた。出土遺物がSK2の不定形石器1点のみで時期を特定できる遺物が無いため、詳細な時期については不明である。

落とし穴は丘陵頂部から斜面にかけて点在している。落とし穴は、丘陵や尾根筋に列状に配置されたり、あるいは湧水地などにまとまって配置されることが多い。したがつて、この周辺にさらに落とし穴が存在する可能性は高いと考えられる。

SK5とSK6は、斜面に対して平行に配置されていることや、規模や平面形が共通する。これに対してSK3は、丘陵平坦部に配置され、斜面に対して直交している。また、SK2はSK3に近い丘陵平坦部に配置されている。SK2、SK3はSK5、SK6とは立地条件が異なっている。

SK1は、堆積土から縄文土器片が3点出土している。その中で深鉢の口縁部片（第8図1）は、平坦口縁であり、外面が無文、内面に沈線とみられる痕跡が確認できる。類似する資料は栗原市一迫山王開遺跡の出土資料で確認でき、この資料は縄文時代晩期後半から弥生時代前期に位置付けられている。SK1出土の口縁部片は小片であり時期について特定することは難しいが、おおよそ同様の時期に位置付けられる可能性も考えられる。

SK4は、遺構を覆う層の上に10世紀前半に降下した灰白色火山灰が堆積していることから、遺構の年代は10世紀前半より古いと考えられるが、詳細な時期や性格は不明である。

VI. まとめ

- 八幡館跡は、栗原市栗駒八幡地内に位置する中世の城館跡である。遺跡は標高約50～100mの丘陵上に立地している。これまで、頂上（主郭）に鎮座する屯ヶ岡八幡神社の西参道付近で古代の土師器や須恵器が採集されている。
- 発掘調査では、土坑6基と縄文土器、石器が発見された。また、城館に関わる遺構は確認できなかつた。
- 発見された土坑のうち4基は縄文時代の狩猟用の落とし穴であり、この場所が狩猟の場として利用されていたことがわかつた。
- 縄文土器、石器が出土したこと、また狩猟用の落とし穴が発見されたことによって、この周辺に縄文時代の集落が存在する可能性が考えられ、その確認が今後の課題である。

参考引用文献

- 一迫町教育委員会1996～1998『国史跡山王廻遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅲ
伊東信雄1957「古代史」『宮城県史』第1巻 宮城県
今村啓爾1994「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究2生業』雄山閣
金成町史編纂委員会2004『金成町史 増補版』金成町
栗駒町教育委員会1972『鳥矢崎古墳群』
栗駒町教育委員会1978『鶴丸館跡』栗駒町文化財調査報告書第2集
栗駒町教育委員会1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集
栗原市教育委員会2006～2009『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第1、4、7、9集
栗原市教育委員会2006『泉沢A遺跡』栗原市文化財調査報告書第2集
栗原市教育委員会2007『国史跡山王廻遺跡発掘調査報告書IV』栗原市文化財調査報告書第5集
栗原市教育委員会2007『水吸遺跡』平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会資料
栗原市教育委員会2008『三玉城跡』栗原市文化財調査報告書第8集
築館町教育委員会1990～2004『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第1～15、17、19集
宮城県企画部土地対策課1986『土地分類基本調査 若柳・一閑』
宮城県教育委員会1978『歴史の道調査結果略報』宮城県文化財調査報告書第55集
宮城県教育委員会1996「栗原寺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第169集
宮城県教育委員会1998『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集（宮城県教育委員会HP参照）
宮城県多賀城跡調査研究所1978～1980『伊治城跡Ⅰ～Ⅲ』多賀城跡間連遺跡発掘調査報告書第3～5冊
室野秀文2004『屯ヶ岡の遺構』第27回般若研究会発表資料
栗原寺調査團1963「栗原寺の諸問題—栗原寺調査中間報告—」『栗駒町史』
藤沼邦彦・神宮寺千恵1992「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心として－」『東北歴史資料館研究紀要』第18巻

写 真 図 版



南調査区全景（北から）



北調査区南部全景（北から） 手前はSK5



北調査区中央部全景（北から） 手前はSK6



北調査区北部全景（南から）



北調査区基本層（斜面中） 南から



南調査区基本層とSK 4土坑断面（西から）



SK 2土坑完掘状況（西から）



SK 2土坑断面（西から）



SK 3土坑完掘状況（南から）



SK 5土坑完掘状況（南から）



SK 3土坑断面（北から）



SK 5土坑断面（南から）



SK 6 土坑完掘状況（南西から）



SK 6 土坑断面（南西から）



SK 1 土坑完掘状況（東から）



SK 1 土坑断面（東から）



SK 4 土坑完掘状況（南から）



SK 2 土坑出土石器



1



2



3

SK 1 土坑出土石器

写真図版 4

報 告 書 抄 錄

栗原市文化財調査報告書第10集

八幡館跡

—市道菖蒲沢後原線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

平成22年3月24日印刷

平成22年3月29日発行

発 行 宮城県栗原市教育委員会

〒989-5171

宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地

TEL : 0228-42-3515 FAX : 0228-42-3518

印 刷 南部屋印刷株式会社

〒987-2215

宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号

TEL : 0228-22-2131 FAX : 0228-22-2175
